

つた松陰は、下田（静岡県下田市）でペリー艦隊に乗り込み、諸外国の情勢探索のため海を渡りうと試みて、獄中の身となります。松嶌もまた、「その氣概思ひべきなり」と、松陰の行動に感銘を受けました。

その後、居を京に移した松嶌は、そこで月性の来訪を受けます。その印象は次のようなものでした。

月性師なる者あり。破衲敝履、鉄柱の杖を提げて來訪す。その人

電田曰鼻、音吐鐘のゞとし。深く外夷の陸梁を憤り、辺防を憂思して慷慨激昂、寅一郎に比して更に甚だし。（同前）

松嶌を突如訪ねた月性は、破れ衣にボロボロの下駄を履き、鉄柱のじとき錫杖を引つ提げていました。この怪僧は、火花を飛ばさんばかりのギラギラした目と大きな鼻を持つていて、その声はまるで鐘のように大きいのでした。そして、諸外国が我が物顔で好き勝手をしてくると憤慨し、海防のことを深く心配して怒り歎き激昂するそのさまは、松陰よりもさうに激しかったことが述べられています。

さらに続けて松嶌は言います。月性は、郷国にあるときは、その説法でもつて聴衆に諸外国の斥退と國家への献身を訴えて銅器を供出させ、銃砲を铸造する原料としました。また京では、本願寺法主に上書して、本願寺門徒の力を合せて天朝を守護することを説き、大いに用いられるところとなりました。さらに紀州藩へも遊説して、紀淡海峡の海防策を献じ、家老以下の信服を得ました。これは、月性の雄弁快論によるものではありません。その慷慨の気が、誠懇の意が、人を悚動鼓舞するのに十分であるからなので、と。

ペリー来航を直接の契機として、幕府以下全国の諸大名や領主は、諸外国に侮りを受けないための武備充実の必要に迫られることとなります。しかし、それとともに諸経費の財源不足はもちろん、軍役や夫役など身分に応じた負担の増加を忌避したいという人情にも阻まれて、それは容易に進展しません。そのよつなかで月性の活動は、藩域を越え、身分を越えて、一步一歩着実に実を結び始めていたのです。



月性画像

林道一画贊・宇都宮默霖贊  
僧月性顕彰会蔵

維新史回廊だより第二八号をお届けします。今年は、僧月性の生誕二〇〇年にあたります。僧月性は、吉田松陰と親交を持ち、久坂玄瑞など維新の原動力となった人物に大きな影響を及ぼしました。では、僧月性とは、どのような人物だったのでしょうか。県史編さん委員会明治維新部会の上田純子専門委員に紹介していただきました。

明治三〇年（一八九七）に発行された西村富次郎『日本偉人伝』（弘文館）は、「世<sup>ある</sup>じや清狂を知りざる者あり、然れども世上苟も眼に一个字を解する者、誰か亦左の詩を知りざるものあり」と（三九頁）と述べて、次の七言絶句を載せていました。

男兒志を立てて郷闕を出す。学若し成るなくんば復た帰らず。  
骨を埋むるに何ぞ期せん墳墓の地。人間<sup>じんかん</sup>到る処青山有り。

これは、天保一四年（一八四三）、当時二七歳であった清狂こと大島郡遠崎村妙円寺（山口県柳井市）の僧月性（一八一七～一八五八）が、まさに上国遊学の途に就ひたる時、その決意と覚悟を詠んだものです。

明治期以降、広く人口に膾炙したこの漢詩は、安重根や毛沢東にも影響を与えたことが紹介されており（愛甲弘志「月性漢詩入門—月性さんの詩の理解のために」第一回 時習館市民講座、二〇一五年）、東アジアの知識人たちにも、共感をもつて広く受け入れられていました。しかし、その作者である月性（清狂は号）については、明治時代においても現在も、あまり知られていないのが実情のようです。そこで、以下この月性という人物について、紹介していきましょう。

Q 月性の生い立ちとその学問について教えてください。

月性は、文化一四年（一八一七）、浄土真宗本願寺派妙円寺第八世住職謙讓の長女尾上を母として生まれます。二二歳の時に京都本願寺において得度し、僧となりました。一五歳で恒遠醒窓の漢學塾蔵春園（福岡県豊前市）に入門し、二〇歳の時には広島藩の儒者坂井虎山の門を叩きます。また、同年佐賀善定寺（佐賀県佐賀市）の精居寮に入つて二年半、真宗僧としての学識を身に付けるとともに、佐賀藩の儒者草場佩川の元にも出入りして、漢学の研鑽を積んでいきました。その後一旦帰郷しますが、二七歳の時、前掲の学問が大成しなければ死んでも帰らない、との誓いを立てて、上方を目指して旅立ちました。

大坂では、当時最大規模の漢學塾であつた篠崎小竹の梅花社に籍を置きます。同時期の入門者には、頬三樹三郎・草場船山・小石中藏らがあり、月性とは終生の友となりました。また、篠崎と交流のある津藩の儒者斎藤批堂、田辺藩の野田笛浦、福山藩の江木鰐水、咸宜園（大分県日田市）を主宰する淡窓の弟広瀬旭莊、高名な漢詩人であり、晩年は政治運動に奔走した梁川星巖とその妻紅蘭ら、当代一流の知識人たちと接

## 維新史回廊だより



第28号  
2017年  
10月発行  
年2回発行

■編集 維新史回廊構想推進協議会  
■発行 山口県観光スポーツ文化部文化振興課  
(山口市滝町一一 TEL ○八三一九三三一一六一七)



参考文献  
三坂圭治編『月性の研究』マツノ書店、一九七九年。  
海原徹『月性』ミネルヴァ書房、一〇〇五年。  
上田純子「儒学と真宗説法—僧月性と幕末の公論空間」塙出浩之編『公論と交際の東アジア近代』東京大学出版会、一〇一六年。

維新史回廊だよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、県政資料館に置いています。既刊号は、維新史回廊ホームページ（「維新史回廊だより」で検索）で御覧いただけます。  
次号は、来年二月発行の予定です。どうぞ御期待ください。

松嶌は、本来政事や軍事を担うべき学士・武士が、真宗僧である月性の働きに及ばないことを嘆きつつ、武士のなかにも松陰のようなものがあることを挙げて、全国にはまだ優れた人材が雌伏していることを思います。そして月性には、あすまぐ東西行脚して、これらの人材を発掘し奮い立たせることを祈念して、送る序としたのでした。

その翌年の安政五年（一八五八）五月一日、月性は、おもに上京出府を控えて萩へ赴かんとするその途上に発病し、妙円寺に引き返して一〇日に没しました。四二歳でした。

ある機会を得ました。

Q 私塾時習館と清狂草堂における月性の活動について、教えてください。

月性が大坂を中心とした遊学の日々に区切りを付け、妙円寺に腰を落ち着けて私塾時習館を主宰するようになったのは、嘉永元年（一八四八）春頃のことです。妙円寺では、月性の叔父周邦が、その以前から近隣の子弟を集めて寺子屋を開いていました。ここに月性が加わったことで、次第に遠方からも入門者がやって来るようになります。そのなかには、大洲鉄然・赤袴武人・大樂源太郎・天地哲雄らがいました。

また、月性を訪ねて全国各地から旧知新識の学者や書生が、その寓居清狂草堂を訪ねて来ました。嘉永元年（一八四八）四月、備中の阪谷朗蘆・山鳴弘蔵に連れられて、上野の田中謙三郎とともに妙円寺の門をくぐつた陸奥高清水（宮城県栗原市）出身の針生大八郎は、月性について、「詩文を能くし、海防を論じ、広く海内外有名の士と交る」「僧中の豪傑、歳々に而立、苦学解らず」と、その「西游日曆」に述べています（『森銑三著作集』一〇（中央公論社、一九八九年）三八五頁）。

その後長崎まで旅して翌嘉永二年（一八四九）江戸に戻った針生は、同郷で昌平黌の先輩にもあたる斎藤竹堂に向ひ、西游中に出会った豪傑の士を挙げて、月性をその第一と紹介しました（斎藤竹堂「清狂草堂記」僧月性顕彰会八九年）三八五頁）。



清狂草堂全図  
田能村直入  
僧月性顕彰会蔵



清狂草堂金蘭簿  
僧月性顕彰会蔵

Q 秋藩内で月性と交際があったのは、どのような人物でしたか？

嚙鳴社 月性は、萩城下にも多くの知友を得ていました。なかでも、藩校出身のエリートである周布政之助や北条瀬兵衛とは、上坂以前から交際がありました。

この周布と北条は、弘化三年（一八四六）、嚙鳴社を発足させます。当時、藩校明倫館では、儒学の經典である四書五経を通じて、将来藩政を担う際の心構えや、国家や政治に対する志を養う教育が重視されました。嚙鳴社とは、それに飽き足らず思っていた明倫館のエリートたちが、唐宋八大家（唐の韓愈・柳宗元、宋の欧阳脩・蘇洵・蘇軾・蘇轍・曾鞏・王安石）の詩文を読んで、より深く國家論・政治論・官僚論・人材論などについて討論考究するための勉強会です。

この嚙鳴社には、能美隆庵・来原良藏・中村九郎・佐久間佐兵衛・松島剛三・山田亦介・口羽徳輔・杉梅太郎・土屋肅海・内藤万里助らが参

加し、時に前田孫右衛門・八谷勝兵衛・中村文右衛門らも出席しています。いずれも幕末史に名を刻んだ、錚々たるメンバーです。月性も、出萩した際には何度もその会合に参加しました。特に土屋・中村九郎・杉とは親交が深く、頻繁に書簡を往復させて、社中諸士の近況から、政事にかかるわざわざまな情報までが共有されました。

久坂玄機 嘉永六年（一八五三）七月、月性は、大坂遊学時代からの

盟友久坂玄機宅に数日逗留します。久坂は、緒方洪庵の適塾で塾頭を務め、伊東玄朴からもその塾長にと望まれたほどの蘭学者で、家業としての医学だけでなく、西洋諸国の歴史地理や兵法砲術など、豊富な新知識を洋書から得ていました。

月性の出萩にあわせ、久坂はその宅に北条・中村九郎・能美り嶽鳴社の諸士を招き、酒席を設けます。そこで痛飲し、大いに盛り上がった様子は、後に月性が「共飲大劇、満城伝えて以て盛会と為す」（「萩城玄機故宅を過り、帳然而して作す」題詞、「清狂遺稿」下、田中治兵衛、一八九二年）と述べており、萩城下の話題になつたほどだったといいます。玄機の弟玄瑞は、その時の月性の様子を、「寸髪鉢の如く、長舌風を生ず、臂張り胆怒り、憂憤に勝てざる者の如し」と述べています（「清狂遺稿跋」古裂会オークションカタログ、二〇〇一年）。

この頃の萩城下は、ペリー来航と、それにともなつて長州藩へも江戸湾警衛の幕命が下つたその報せがもたらされたことによって、応援将士の直接のきっかけは、遊學中に接した会沢正志翁の「新論」と、イギリスと清（中国）との間のアヘン戦争（一八四〇—一八四二）に関する情報であつたと考えられます。弘化二年（一八四五）、津に斎藤拙堂を訪ねた月性は、拙堂の琉球・蝦夷地も含めて日本の沿海防衛について論じた「海防策」に深い感銘を覚えたことを告げ、拙堂と熱く議論を交わします（「過津城訪拙堂先生賦呈」『清狂遺稿』上（田中治兵衛、一八九二年）三〇丁）。拙堂も、月性を手厚く遇して以降親しく交際し、後に「方外翹楚」（僧中の俊秀）と評してその死を惜しみました（巽遜齋

Q 月性が海防僧と言われる所以について、教えてください。

月性は、西洋諸国東アジア進出に強い危機感を抱いていました。その直接のきっかけは、遊學中に接した会沢正志翁の「新論」と、イギリスと清（中国）との間のアヘン戦争（一八四〇—一八四二）に関する情報であつたと考えられます。弘化二年（一八四五）、津に斎藤拙堂を訪ねた月性は、拙堂の琉球・蝦夷地も含めて日本の沿海防衛について論じた「海防策」に深い感銘を覚えたことを告げ、拙堂と熱く議論を交わします（「過津城訪拙堂先生賦呈」『清狂遺稿』上（田中治兵衛、一八九二年）三〇丁）。拙堂も、月性を手厚く遇して以降親しく交際し、後に「方外翹楚」（僧中の俊秀）と評してその死を惜しみました（巽遜齋

Q 当時の人々に、月性はどのように見えていたのでしょうか？

寅二郎に比して更に甚だし 伊勢松坂の儒者家里松嶋（一八二七～一八六三）は、世古格太郎や梁川星巖とともに活動した尊王運動家です。この松嶋が、安政四年（一八五七）六月、本願寺の要務を一日終えて帰國しようとする月性に送つた送序「送浮岡月性序」（『松嶋文鈔』（擁万堂、一八八〇年）を紹介して、質問の答えに換えようと思いまわ。

松嶋は、かねてから周防・長門には磊落奇偉の士が多いと聞き及んでいましたが、長門の吉田松陰、周防の月性と会い、それが本当であったと得心したといいます。伊勢に松嶋を訪ねた松陰は、「慷慨激昂、勃々時務を論じて傍らに人なきがごと」（同前）きでした。その後江戸に向